第39号

浜かいどう通信

＝発行＝
一般社団法人 茶道裏千家淡交会いわき支部
〒971-8172
福島県いわき市泉玉露3-13-15
伊東宗恭方
TEL・FAX　0246-96-5232

＝編集＝
総務委員会

「いわき支部設立三十周年記念式典」について

佐川宗伸

令和六年九月十六日、いわき市文化センター大ホールに於いて「いわき支部設立三十周年記念式典」が開催されました。

はじめに、伊藤支部長より平成七年に福島県支部を福島・郡山・いわき・会津の四支部に分割して発足以来、裏千家茶道宗家と総本部の指導の下、いわき支部として浜通り一円の淡交会会員により、地域茶道の普及・啓発・研修などの茶道文化活動等を推進してきたこと、平成十三年四月いわき支部主管で第四十五回東北地区大会を開催さらには一万人テャリティ茶会実施などの事業が評価され平成十四年二月淡交会全国総会で「優良支部」表彰受賞、平成二十三年三月十一日の巨大地震による東日本大震災・津波・原発事故・風評被害などを経験し困難を極めた時期を乗り越え、平成二十八年五月に南相馬市で支部設立二十周年行事「復興の集いｉｎ相双」を開催、東日本大震災後会員一丸となって活動してきた六年間の活動が評価され、平成二十九年十一月淡交会全国総会で栄誉ある「優秀支部」表彰受賞したことなどをお話しいただきました。今後とも茶道文化をつないでいくために、持続可能な支部の発展に努力していきたいとの力強いご挨拶をいただきました。

来賓として、いわき市長内田広之様のご臨席をいただき、祝辞の中で「守破離」という言葉が大変印象深く心に残っております。市長は地域の文化的推進を強く重視しており、自らも剣道に親しみ、剣道と茶道、同じ「道」を冠する伝統文化は単なる技術や作法の習得を超えて、共に心を磨く道でもあり、人間としての成長を重んじる点で共通しており、この文化の力こそが地域の未来を切り開くことに繋がるのではないか、文化発展の鍵となる「守・破・離」の考

え方をお話しされ、深く共感いたしました。

また、式典の中で、いわき支部の発展にご尽力されました元幹事長 横山宗真様、船生宗敏様、矢内宗繁様に感謝状が贈呈されました。

続いて、記念講演には芥川賞作家の松村栄子氏を講師にお迎えし、演題「ひよっこ茶人の京（みやこ）暮らし」では、ご自身の趣味でもある茶道を題材とし、スクリーンを通しての講演は大変興味深く引き込まれるものがありました。講演を通して、松村氏の温かく知的な人柄、茶道に対する深い愛情と伝統文化に対する新たな視点を提供してくださり、松村氏の語り口からは、心を込めて取り組むことで、深い喜びや成長が得られることを感じ取ることができました。

講演の最後に、伊東幹事長から、遠方よりお越しいただいた松村氏にねぎらいの言葉が伝えられ、式典が始まるまでの午前中、濃茶席、薄茶席、学茶・青年部による呈茶席を担当された先生方、準備段階から今日に至るまでの支部会員の皆様の熱意とご協力に対して、無事にこの節目を迎えられたことへの感謝の言葉が述べられました。

この三十周年記念式典は、これまでの歩みを振り返り、未来への新たな一歩を踏み出す機会となり、今後の更なる発展を誓う場になったのではないでしょうか。

濃茶席

村田宗美社中

阿部宗由

大山宗香

九月十六日、初秋の気配が感じられる中、いわき支部設立三十周年記念茶会が開催され、私達は濃茶席のお点前を担当させていただきました。あまり経験のない点茶盤でのお点前。点茶盤は真塗りのため傷がつきやすく、左手前には大宗匠の花押があり、お道具の取り扱いに大変緊張しましたが大きな失敗もなく、お客様からも「美味しかった」と、お誉めの言葉をいただき安堵いたしました。

午後から松村先生の記念講演でしたので、茶席は午前中となり、また感染対策としておひとり一碗ずつお出ししました。時間がいつもより限られておりましたが、水屋の皆様のおかげでスムーズに流れ、六席開くことができ、毎回満席に近いお客様をお迎えすることができました。

お茶を習いたての頃は、全てが初めてのことばかりで人前でお点前をすることなど想像もつきませんでしたが、三十数年後、このような記念茶会でお点前をさせていただけたことに感慨深いものがあります。いつも温かくご指導してくださる先生、これまで一緒に精進してきた社中の方々に感謝するばかりです。

お茶は経験を積めば積むほど奥が深く、わかったと思ってもわからないことばかり、「十よりかえるもとのその一」の言葉を実

感しております。
これからも初心を忘れることなく、日々精進していきたいと思います。

薄茶席

渡邉　宗　靜

今年の勅題は「和」。薄茶席のテーマも「和」に致しました。お床には鵬雲斎大宗匠のお筆の「和気生萬福」をかけました。

鵬雲斎大宗匠は戦争を経験なされ、平和の大切さを話されております。淡交会いわき支部は歴代の支部長初め、役員の諸先生方、淡交会会員が、茶の心、和の心をもってつないできてくれての今があると思います。

すすき、吾亦紅、高砂芙蓉、カッコウアザミ、花茗荷を敬福籠に入れ、茶杓は坐忘斎お家元作「福の神」薄茶は坐忘斎お家元好の「悠和の白」と致しました。

九月は重陽の節句（菊の節句）があり、香合は乾漆の菊、水指は色絵桐菊、棗は坐忘斎お家元花押の松葉蒔絵、主茶碗は大宗匠のお箱書の朝日焼、替茶碗に仁清写金砂子菊、玉の群菊と菊づくしにし、淡交会会員皆様の健康と淡交会のますますの発展を願いました。

翌日の十七日は仲秋の名月、待合床に米重筆の『月に雁図』をかけ、菓子はみよし製の兎まんじゅうと致しました。

あれもこれも想いが沢山つまった薄茶席になりました。この想い皆様に届いていれば幸いです。

学茶・青年部席

いわき学校茶道連絡協議会
委員長　船生　宗敏

淡交会いわき支部三十周年記念茶会にいわき学校茶道連絡協議会といわき青年部合同で担当させていただきました。

はじめての合同でのイベント担当で交流もないし、年齢差もあるしでお互いに心配しながらのスタートでした。最初の打ち合わせで青年部から積極的に茶席についての構想がだされ、さすがに青年部と思い、頼もしい相方と安心しての出発でした。前日の準備から学茶会員と青年部員の共同作業がはじまりました。本席は青年部、水谷は学茶と担当を分け、市内高校茶道部の生徒がお茶を点て、お茶をお客様に運び、戻った茶碗を洗うことをしていただきました。

お点前も茶道部員でした。

市内の高校茶道部員が主人公の茶席になりました。ほとんどが初対面同士の集まりでありながら、なんら支障もなくスムーズにことが進み茶会が終わりました。終わってみて、ホッとするとともに順調に終わるものだとも自信がありました。各人が裏千家の茶道の日々修練を積み、茶会の成功に向かって、心をひとつにしての三十周年記念茶会になったと思っています。

いわき学校茶道連絡協議会の会員の皆様、いわき青年部の部員の皆様、市内高校茶道部員の生徒のみなさん、誠にありがとうございました。

〔参加校〕

磐城高校、磐城桜ヶ丘高校、平商業高校、磐城農業高校、磐城一高、福島工業高等専門学校

学茶・青年部席

青年部部長　多賀　裕子

いわき市文化センター一階大講義室において、学校茶道連絡協議会・青年部合同呈茶が行われました。

いわき支部が三十周年を迎え、未来に向かって行くという意味でテーマを「前進」とし、学茶席・秋ということから「文化祭」のイメージでしつらいを考えました。

お床は、月浦和尚の筆で「千里同風」の短冊とし、様々な将来を描き旅立って行くだろう学生さん方にとっての追い風となってくれるよう想いを込めて掛けさせていただきました。香合は独楽塗りのいわきこけしを、花入は青竹の一重切にして若々しさを出しました。

水指はいわきの土を使った常磐白水焼を、茶杓はいわきで地区大会があった折に青年部が譲り受けた初代いわき支部の馬目支部長の削られた「銘　一葉」を使わせていただきました。また、蓋置はいわき支部・学茶・青年部が協力して今日の日を迎えたという意味を込めて仁清写の三つ人形にしました。

お菓子は、大震災後に長く東北を援助してくださった小松市の行松旭松堂製「旅の衣」を、抹茶はコロナ禍の折にオンライン茶会などでお世話になった芭蕉園詰めの「芭蕉の白」を、今回様々なご縁を経て使わせていただくことになりました。

当日参加の学生さん方は、大人相手の呈茶で大変緊張していましたが、銀杏の葉飾りに未来に向けてのメッセージを書いて点前座背後に飾ってもらい、青年部が作成したお揃いの古帛紗を渡すと、元気にお点前やお茶碗運びをしてくれました。また、茶碗洗い・お茶点てなどの裏方の仕事も学茶指導の先生方の教えを受けながら丁寧にやってくださいました。

今回、学茶・青年部合同という機会を頂くにあたり、多くの不安がありましたが、たくさんの方の助けを受けて無事当日を迎えることができました。このような得難い機会をくださり、支部の先生方及び学茶担当の先生方には、青年部一同心より感謝申し上げます。

編集後記

いわき支部設立三十周年記念行事も皆様のご協力のもと、無事終える事ができました。誠にありがとうございました。

講演会にて、松村栄子先生の小説の主人公、友衛遊馬の「ひとたび正客となれば趣向を盛り上げ　次客となれば聞き上手となり　詰めとなれば気がよく働き　亭主となれば命を賭して誠を尽くす　そういう茶人に　わたしは　なりたい」というフレーズが心に響きました。

これから深まりゆく秋に粗茶一服を味わってみては、いかがでしょうか。